

城郭探訪

まちづくりと城の址

丹波市 黒井城

黒井城と城下町形成

黒井城の概要

丹波市にある黒井城は、標高356mの猪ノ口山にある山城で、南北朝時代の建武2（1335）年、春日部莊を領した赤松貞範が山頂に砦を築いたことからその歴史が始まるといわれています。

その後、約200年間数代にわたって城主の変遷がありました。戦国動乱のさなかの天文23（1554）年、荻野直正が城主となり、その勢力の拡大とともに大改修されたのが現在の黒井城です。

一番高い山頂の主郭部には、複数の曲輪を並べ、これを囲んで中腹に六つの曲輪を配置し、さらに主要な尾根には砦を築いています。

また、山中のいたるところに曲輪・土塁・堀切・切岸などの防御施設が配置され、約120haにも及ぶ広大な猪ノ口山系全体が城跡であり、国の史跡となっています。天正7（1579）年8月、さしも堅固

を誇った黒井城も、丹波平定を急ぐ明智光秀の大军の前に落城しました。

その後、主郭部の石垣が築かれるなどの改修が加えられましたが、400年余の風雪に耐え、今でも戦国時代から織豊期にかけての城の様子をそのまま残している城跡として平成元年に国の史跡に指定されました。

主郭部は、半独立した猪ノ口山の山頂を平らに削り、中央より少し西にかたよって一番高く広い本丸を置き、西に西曲輪

丹波市長（兵庫県）

林

時彦



を接続させて左に空堀を隔てて二の丸、さらに角度をやや南にふって三の丸と東曲輪を次第下がりの階段状に配しています。

また、これらを取り巻いて南側、北側に約5mの段差で帯曲輪を巡らしています。

これは、階段状接続城郭と呼ばれ、中世の山城に多く見られる縄張りです。城の虎口周辺と、本丸・二の丸の南面には自然石をそのまま使った野面積みの石垣が積まれています。

これらの石垣は、黒井城落城後、城下の統治にあたった斎藤利三、堀尾吉晴など、織田・豊臣政権下の武将によって築かれました。

主郭部にどのような建物が建っていたのかは資料がなくわかりませんが、軒丸瓦や軒平瓦、鯉瓦の一部が出土していることから、瓦葺きの建物があったと考えられています。



東曲輪石垣



黒井城主郭部



黒井城



黒井の町並

織豊期のまちづくり

戦国期の荻野直正が城主の頃は、黒井城から半径2〜4kmの春日盆地の範囲内に館跡、寺院、市場など、都市の要素が点在していました。

ところが、織豊期の黒井城・城下町は基本的に集約化・疑集化の方向へ進みま
す。すなわち、城の機能が猪ノ口山山頂部に、城下町の機能が猪ノ口山南麓部分



黒井城山頂から見える雲海（著者撮影）

の黒井村に集中していきます。黒井には今も猪ノ口山山麓を囲むように通る旧福知山街道と、その南側に平行して通る旧京街道があります。この2本の街道を織豊期の長方形街区が接続して、これを基軸に東西の境界を設定する複雑なまちづくりがされます。そして、旧福知山街道を境界としてその北側には武家屋敷群を配置し、南側の旧京街道は複数の市場と接続することで、春日盆地の各地に点在

していた要素を黒井村に集約し、春日盆地の拠点集落としての地位を確立しました。
この黒井村は廃城下町ではなく、江戸時代も亀山藩の代官所があり、実質的には都市として存続していました。元禄期作成と伝える「黒井城下絵図」と地籍図の街路プランがほぼ一致しているため、近世のころの姿を残したまま現在の黒井の町並はつくられているようです。

城と都市の でんせつ

歴史探訪コラム

江口知秀
建設産業図書館 学芸員

「丹波」の由来

兵庫県氷上郡にあった美和村（現在の丹波市市島町の南西部）が、昭和52年に刊行した『美和村誌』には、「丹波」の地名由来を説明する伝説が紹介されている。

皇極天皇の時代というから、今から1400年ほど前のことになるが、妙高山脈からの流水は、小多利から竹田川あたりを底無しの池にしており、そこには大蛇が棲んでいたのだ、妙高山の権現には誰も参詣できなかった。

そこで、小多利の弁財天に祈祷して、神力をもって池に水を張って大蛇を閉じこめ、里人たちは水上を歩いて参詣することが出来るようになった。これが、氷上郡の地名となったという。

しかし、大蛇はいつのまにか池を抜け出してしまい、与戸の奥の地獄谷にかくれて

いた。ある年、長者の娘がそこを通りかかり、大蛇に食われてしまった。それを聞いた長者は、大蛇を見つけたし、弓を射かけたのだが、岩のようなウロコに跳ね返されてしまう。

そこへ長者の家来・獺五郎兵衛がやってきて、頭を殴りつけた。驚いた大蛇は池の中に逃げこんだが、獺は泳ぎの達人だったので、水中で大蛇と格闘し、ついに打ち取ることができた。池は大蛇の血で真っ赤となり、後に丹波（赤い波）の国名が生まれた。この池は坂折区の長蛇の池のことだという。

ちなみに、『日本歴史地名大系29 I 兵庫県の地名 I』によれば、「丹波」の地名は、奈良県明日香村出土木簡に「旦波国」とあるので、もともとは赤を意味する「丹」よりも、「旦」が古い表記だと考えられるという。